提督＆艦娘シリーズ第二弾

ツンデレ提督と金剛
～未来への航路～

衛地朱丸
表紙絵／anじぇら

極東燃萌帝國

目次

序章　スエズ運河の怪物｜５

第一章　陽気な押しかけ女房｜７

第二章　スエズ作戦発動！｜２０

第三章　カスガダマ沖海戦｜４１

第四章　触れ合う二人｜５７

第五章　スエズ運河攻略戦｜７３

第六章　シュッサンカッコカリ｜８４

最終章　未来への航路｜９１

後書き　１０１

本作は、艦隊これくしょん－艦これ－を独自解釈した二次創作小説、提督＆艦娘シリーズの第二弾です。第一弾とは主役とヒロインが異なりますので、この本のみでもお楽しみすることができます。
大本の話は続いていますので、前作をお読みになれば、より一層楽しむことができます。

序章：スエズ運河の怪物

「全砲門、ファイヤー!!」

三式弾を装填した三五・六センチ連装砲を、上空の敵機に向かい発射する戦艦金剛。

刹那、無数の火花の雨が敵艦載機に降り注がれる。通常ならばこの攻撃で半壊できるはずだが。

「シットッ！」

だが、ピラミッドを二つ合わせたような独特の形をした黒色の浮遊物体にはかすり傷一つ与えられず、全機健在で無情にも飛来する。

「あああっ!?」

金剛は成す術なく、ピラミッドの隙間から発せられる熱線に身体を焼かれる。

「金剛！　もういい、もう退くんだ!!」

このままでは轟沈してしまうと、私は撤退を命じる。

「ホワット？　何言ってるんデスカー提督？　私はまだまだ戦えるネ！　ノープロブレムデース!!」

しかし、艤装がボロボロになっても尚、金剛は物怖じせず戦い続けようとする。

「命が惜しくないのか！　撤退しろ!!」

私は声を荒げて命じ続ける。

「ノー！　デース!!　提督とのヴァージンロードを切り開くまでは、絶対にエスケープしまセーン!!」

金剛は力強い笑顔でボロボロの身体に鞭を打つように立ち上がり、敵に砲門を向ける。

ここはアフリカスエズ運河。欧州との交易路の要であるスエズ運河を深海棲艦から奪還するのは、我が国のシーレーンの回復には必要不可欠だ。

しかし、運河の中央部に位置するワニ湖に存在する未知の深海棲艦により、我が艦隊は壊滅の一歩寸前まで追い込まれてしまった。

「ナンジハ……ナニモノカ？」

こちらの攻撃を尽く防ぎ切った深海棲艦は、不気味な声で問い掛けてくる。

その姿は、怪物の下半身に、褐色肌の少女の上半身を持った、ギザのピラミッドを守護するスフィンクス

を連想させる異形の姿。顔の装飾は、どことなくエジプトのファラオを髣髴とさせる。
運河棲姫と名付けられたこの深海棲艦は、旅人に朝は四本足、昼は二本足、夜は三本足と謎掛けするギリシャ神話のスフィンクスのように、金剛に問い掛ける。
質問に答えられなかったら、神話のように食らい尽くすとでも言いたいのか？
「愚問デース！　私は艦娘！　英国生まれの帰国子女、金剛デース!!」
あと一撃で大破するかもしれないこの絶望的な戦況下で、金剛は不敵な笑みを浮かべながら明朗な声で答える。
まったく。こんな状況で笑っていられるなんて。相変わらずだな君は。出会った時から本当に、何も変わっていない……。

第一章：陽気な押しかけ女房

「ヘーイ、提督ー！　金剛特製のビーフシチューが完成したヨー!!」
「……」
エプロン姿で意気揚々とシチューの入った皿をテーブルへと運んで来る金剛。私はただただ椅子に座りながら静観しているだけだった。
「ホワット？　どうしたネー提督？」
私が微動だにしないのを怪訝に思った金剛は、顔をジロジロと覗き込んでくる。
「分かったネ！　一人じゃ食べられないんデスネー」
そうならそうと早く言って欲しいデースと、金剛はニコニコと笑いながらスプーンでシチューを掬い取る。
「ハーイ！　アーンするネ、提督ー！」
そしてご丁寧にも、スプーンを私に口元まで運ぶ。
「……」
しかし私は、口を開けずに沈黙を続ける。
「ホワット？」
私に食べさせて欲しくないのなら、一体何なのネーと、金剛は首を傾げる。
「分かったネ！　提督もムッツリデース!!」
こちらが何も語っていないのにまたしても勝手に解釈して、金剛は一旦スプーンを皿に戻す。
「いただきマースのキスが欲しいんデスネー！」
と、一方的に金剛は私の頬に唇を近付けようとする。
「……！」
私はいきり立つように自らスプーンを持ち、せっせとビーフシチューを口に運ぶ。
「オウッ！　提督もせっかちデース」
あからさまに拒否されているにも関わらず、金剛は顔色一つ変えず、ニヤニヤと笑いながら私が食い終えるのを静観する。
「はぁ……」
シチューを平らげると、私はテーブルに両肘を付きながら俯き、大きな溜息を漏らす。
「金剛のラヴがいっぱい詰まったビーフシチューの味

はどうデシタカー提督ー？」
　感想を聞かせて欲しいデースと、金剛はキラキラとした目で私の口が開かれるのを待ち続ける。
「普通に美味しかった。店で食べるのと遜色ないくらいにな……」
「ワオッ！　コングラチエーション!!」
　提督のハートを見事に掴んだネーと、金剛はハイテンションで喜ぶ。
（だから余計に悩ましいのだが……）
　これで不味かったら思いっ切り罵倒してやるのだが、非の打ち所がないほどの出来栄えなのだから、反論のしようがない。
　こんなに私を煩わしくさせる性格なのに、料理に関しては一人前なのだから評価に困る。
（一体何故、こんなことになってしまったんだ……）
　金剛の左手の薬指にキラリと光る指輪。それは、提督と艦娘の信頼と絆の証である、ケッコン指輪だ。
　しかし当の私は、金剛とのケッコンを望んだわけではない。勝手に指輪をはめられ今の状況下になってしまったことに、私は頭を抱えざるを得なかった。
（あの時承諾していなければ、こんなことには……）
　自らの左手の薬指にはめられたケッコン指輪を眺めながら、私は数時間前の自分の判断ミスに激しい後悔を抱くしかなかった。

◇　◇　◇

「失礼します」
　休暇が明けた私は、重い足取りで横須賀鎮守府の執務室に出頭した。
「うむ。よく来てくれた、冷静提督」
　私の顔を見た司令長官は、穏やかな顔で海軍式の敬礼をしながら私を出迎えてくれる。
「ご迷惑をおかけしました。本日より現場に復帰致します」
「うむ。扶桑の件は君の責任ではない。そう悔やむことではない」
　それよりも、君が責任を感じるあまり退役すると言

わなくて良かったよと、司令長官はホッと胸を撫で下ろす。
「いえ。人類と深海棲艦の戦いはまだまだ続きます」
制海権を人類の手に取り戻すその時まで提督を辞するつもりはありませんと、私は毅然とした態度で答える。
「その心意気や結構！　しかし私は、その生真面目さが君自身を潰してしまわないか心配だよ」
ここは心機一転に新たな艦娘を迎えてはどうだねと、司令長官は勧める。
「新たな艦娘ですか」
確かに、扶桑が抜けた穴を埋める艦娘は必要だが。並みの艦娘では、彼女の代わりは務まらないだろう。
「ちょうど最年長の艦娘が、君の艦隊への編入希望を出している」
君が良ければ今すぐにでも編入させると、司令長官は語る。
「最年長ですか」
その言葉に、私の心は揺らいだ。艦娘で一番の年長者なのだから、洞察力が深くて物静かな艦娘に違いない。
「了解です。謹んで承ります」
それほどの技量と経験を兼ね備えた艦娘なら扶桑の代わりが務まるだろうと、私は最年長という言葉に惹かれ、司令長官の提案を了承した。
「うむ。彼女もきっと喜んでくれるだろうよ」
「では、これで失礼します」
着任報告を終えて、私は執務室を後にしようとする。
「ああ、待ちたまえ。君に渡したい物がある」
そう言って、司令長官は私を引き留める。
「？」
「実はだね。君の分が完成してね……」
司令長官はもったいぶるように言いながら、小さなケースを私に見せる。
「これは⁉」
司令長官がケースを開けた瞬間、私は声を上げざるを得なかった。
「君なら、言わずともこれが何だか分かるね？」

「はい……」
私は静かな声で頷いた。
司令長官が私に見せた物。忘れるはずもない。先の潜水母姫との戦闘。仕留めたと思った矢先に産まれ出た空母ヲ級改の猛攻により、私の艦隊は壊滅に追い込まれた。
その窮地を救ったのが、このケッコン指輪を付けた電だ。
「誰に渡すかは、こちらでは命じない。君の慕う艦娘の左手の薬指にはめてあげなさい」
「了解です。ご命令とあれば受け取りますが……恐らく私が使うことはないでしょう」
念を押すように、私は断りを入れた。
「やはり君には受け入れ難いかね？」
「はい。指輪の力は認めます。その力がなくては、あの局面で全滅は避けられませんでした」
しかし、提督と艦娘の信頼や絆といった、感情という不確定要素を基にした物に頼るのは私の理念に反すると、私はハッキリと己の意志を伝えた。
「もちろん、他の提督がこの指輪を艦娘に与えるのまでは否定しませんが」
「うむ。君の考えはよく分かった。ケッコン指輪を艦娘に与えぬというのも、選択肢の一つだ」
だが、持っていて損でもないと言われ、私は渋々指輪の入ったケースを受け取ることにした。
「では、改めて失礼します」
私はケースを受け取ると、踵を返して執務室を後にした。

◇　◇　◇

（ケッコン指輪か……）
見た目は極普通のウェディングリングだ。妖精石を加工して造った物だから特殊な力を発揮させられるという話だったが、見知らぬ人に身に付けているのを見られたら、変な誤解を与えそうだな。
（扶桑、君が健在だったら、はめていたかもしれないな……）

一瞬そう思いかけたが、あり得ない可能性に自嘲する。
何故なら、先の海戦で潜水母姫を私の艦隊が仕留めていたら、扶桑が大破することはなかった。
しかし同時に、ケッコン指輪の力は未知数のままで、今回のように量産されることはなかっただろう。
皮肉にも、あの海戦で扶桑が大破したからこそ、このケッコン指輪が私の手元にあると言っても過言ではないのだ。
（君を差し置いて他の艦娘に与えるなど、到底できないな）
司令長官にはいかにも論理的な理由を語ったが、私の本心はそこにあるかもしれない。これは私の罪の証だ。扶桑、君を傷付けたことで手に入れた物など、誰にも渡せやしない。
「……」
ケッコン指輪をジッと眺めながら物思いに耽った後、私はケースの蓋を閉めようとする。
「バァァァニング……ラァァァヴッ!!」
そんな時だった。廊下の先から何やら奇声を発しながらドタドタと走る音が聞こえた。
「一体何の騒ぎだ……」
耳障りな声だと呆れつつ、一刻も早く立ち去って欲しいものだと、私はおもむろに顔を上げる。
「提督のハートを摑むのは、私デース！」
「なっ!?」
しかし、声の主は私の前を通り過ぎるどころか、猪突猛進に迫って来て。
「緊急回避!?」
咄嗟に避けようとするが時既に遅く、私はそのまま押し倒されてしまった。
「まったく、何なんだ一体……」
とんだ災難だと思いつつ、私は起き上がろうとする。
「んっ？」
しかし、何やら手元が妙に柔らかく、私は感触に違和感を抱いてしまう。
「ワオッ！　いきなり大胆デスネー！」
「なあっ!?」

気が付けば、いつの間にか声の主の尻を触っていて、私は驚きのあまり平静を失ってしまう。
「ヘイッ、提督ー。触ってもいいけどサー、時間と場所を弁えなヨ！」
「いやっ、私は別に触りたいわけではなく、君の方からぶつかって来たんだろう、金剛！」
私は弁解しながら、声の主の名を語る。会うのは初めてだが、巫女装束の服装と、特徴的なハスキーボイスから、金剛型一番艦金剛で間違いない。
「ソーリー。でも、これから挨拶しに行こうと思った時にぶつかるなんて、ディスティニーな出会いデース！」
「まったく意味が分からないぞ……」
何故この状況が運命の出会いなのかと、私は呆れ声で訊ねる。
「ホワット？　私の編入を承認したのは提督ネ？」
何言ってるネと、金剛はキョトンとする。
「私は君の編入を承認した覚えはないぞ」
確かに最年長の艦娘の編入には応じたが、それは君のことではないだろう。
「でも、さっき司令長官から承認されたぞって、連絡がありましたヨー？」
だからこうして会いに来たネーと、金剛は明朗な声で語る。
「いや、私が承認したのは、最年長の艦娘で……」
「だから、その艦娘が私デース！」
「なっ、なんだってー!?」
そんな馬鹿な！　こんな軽快なノリのふざけた奴が、最年長だというのか!?
（いや待て！）
私はふと、座学で学んだことを思い出した。艦娘の外見は、その者の艦種が反映されている。
対して年齢は外見的特徴とは必ずしも一致せず、それぞれの艦齢が反映されていると。
長生きしたという意味では、戦後まで生き延びたヴェールヌイや雪風が年齢は上かもしれない。しかし、竣工順で言えば、金剛型が最古参。金剛はその一番艦なのだから、必然的に年長者ということになる。

（迂闊だった！　私としたことが……）
最年長という言葉から、思慮深い艦娘を連想してしまい、具体的に誰かまでの確認を怠り、承諾してしまった。もしも金剛だと分かっていたのなら、断固として拒否したはずだ。
自ら厄災を招いてしまったことに、私は激しい後悔の念に駆られる。
「ワオッ！　これが提督のケッコン指輪デスネー」
そんな時だった。金剛は廊下に転がっていたケースを拾い上げ、中に入っていた指輪を勝手に取り出し、興味津々な顔で見つめる。
「なっ！　かっ、返せ!!」
私は声を荒げて返還を要求した。その指輪は、誰にも渡すつもりはない。私には必要のない物だが、勝手にはめられるわけにもいかないと。
「ピッタリはまりマシター！」
しかし金剛は私の制止を完全に無視し、あろうことか自らの左手の薬指にはめたのだった。
「あああ!?」
取り返しの付かない事態になってしまったことに、私は愕然としてしまう。
「今すぐ外せ！」
私はいきり立ち、金剛に外すよう強い口調で命じる。
「ノーデース！　この指輪はもう私の物ネ！」
無論金剛が私の命令を聞くはずもなく、指輪がはめられた左手の薬指をまじまじと見つめる。
「勝手なことを!!」
確かに詳細な確認を怠ったとはいえ、彼女が私の艦隊に編入されたのは確かだ。腑に落ちないが、それは認めるしかない。
しかし、唐突に押し倒すやら指輪を勝手にはめるやら、もう我慢の限界だ。
「まぁまぁ。そんなにヒートしないで、クールになるネ！」
冷静提督なのに全然冷静じゃないデースと、金剛は私を軽快な声で宥めようとする。
「この状況下で冷静でいられるか！」
私自身、艦娘の応対でこんなに憤ったのは初めてだ。

一方的に攻め寄って来て冷静になれなどとは、身勝手にもほどがある！
「仕方ないデスネー」
金剛は態度を改めることもなく、徐に私の左手を掴む。
「だったら、こうするネー！」
そして、私の左手の薬指にケッコン指輪をはめるのだった。
「なっ⁉　なっ⁉　なあっ⁉」
全ての動作が素早く無駄がなく、私は流れるまま指輪をはめられてしまった。
「ほら？　静かになったネ！」
我ながらグッドアイディアデースと、自画自賛する金剛。私は単にショックのあまり意気消沈し、怒る気持ちすら湧かなくなっているだけなのだが。金剛はそんなことお構いなしにはしゃぐだけだ。
「もういい。もう沢山だ……！」
今すぐ私の前から立ち去れと、私は静かな声で訴える。
「ふーん。そこまで言っても、私に手は出さないんデスネー」
てっきりビンタの一発でもかましてくると思ってたネと、金剛は意外そうな顔で呟く。
「殴ったことで解決する問題ではないだろう」
第一、いかなる理由があれ私は決して艦娘に手は出さないと、ハッキリとした声で己の主義を伝える。
「……。扶桑の言った通りデース。提督は優しい人なんデスネー」
「えっ⁉」
一瞬金剛が透き通ったような笑顔を見せて、私の心は不思議と落ち着きを取り戻してしまう。
「何故君が、扶桑の名を語る？」
扶桑に何か吹き込まれたのかと、私は訊ねる。
「じゃあ、今日はこのくらいで引き上げるネー。グッバイデース、提督！」
金剛は私の質問に答えることなく、笑顔を撒き散らしながら姿を消した。
「はぁ……」

ようやく嵐が過ぎ去ったことに、私は安堵の溜息を漏らす。

しかし、今日はこれで済んだものの、これから彼女を指揮しなければならないと考えると、今から気が滅入る。

復職の挨拶をしに来ただけなのに、どうしてこんなに疲れなければならないんだと憂鬱な気分になりながら、私は家路へと就いた。

◇　◇　◇

（さて、どうしたものか……）

帰宅後、私は一人思い悩んでいた。金剛の処遇に関して。

可能ならば司令長官に意見具申して再配置転換して欲しいものだが、着任早々でそれは難しい。第一彼女がケッコン指輪をはめてしまった以上、私が少なからず好意を抱いていると解釈されるに決まっている。

私は金剛のことを煩わしくさえ思っているのだが、周囲はそう評価しないだろう。

（こんな時に扶桑がいれば……）

快く相談に乗ってくれて、的確なアドバイスをしてくれたことだろう。

（！　また私は……）

扶桑のことを思い起こしてしまった。そもそも私が扶桑を大破させなければ、金剛が私の艦隊に編成されるなどあり得なかったのだ。結局は自分が蒔いた種なんだと思うと、自虐的な気持ちにならざるを得ない。

「ん？」

そんな時だった。突然家のチャイムが鳴った。

「誰だ、こんな時間に？」

時間的に宅配物が届けられるとも思えない。大方どこぞの宗教団体の勧誘やキャッチセールスなどのくだらない客だと思いつつ、私はとっとと追い返そうと重い腰を上げ、玄関の方へ向かった。

「何か？」

「グッドアフタヌーンデース、提督ー！」

「何っ⁉」
ドアを開けるや否や金剛が飛び込んで来て、私はまたしても押し倒されてしまう。
「一体何の用だ、金剛？」
「不束者デスガ、今日からヨロシクオネガイシマース！」
「何の話だ？」
今更着任の挨拶をするためだけに来たのかと、私は呆れ声で返答する。
「ノーノー、そうじゃないネ！　金剛は、今日から提督と同棲シマース‼」
「何だと⁉」
一体どうすればそんな話になるんだと、私は戸惑ってしまう。
「ケッコン指輪をはめたんだから、当然のコトネー！」
お互いの信頼と絆を深めるためには同棲は必要不可欠デースと、金剛は一方的に話を進める。
「私はそんな許可は出していないぞ⁉」
「さぁさぁ、ドンドン荷物を運ぶネ、比叡、榛名、霧島ー！」
「何だとっ⁉」
玄関の方に向けると、そこにはご丁寧に金剛三姉妹が引っ越し荷物を持ち抱えて待機していた。比叡は何か不満がある顔をしていて、榛名と霧島はニコニコと笑っているだけだ。
「まっ、待て君たち！」
必死に制止しようとするが、高速戦艦の圧倒的馬力には太刀打ちできず、私はみすみす侵入を許してしまう。
「私は、本当は反対なんだけどね……！」
ギラッとした目で私を睨み、ぶつくさと文句を言いながら荷物を運ぶ比叡。
「だったら、今すぐ荷物を持って寮に帰れ！」
その方が私としても助かると、比叡の心に揺さ振りをかける。
「いいえ！　それは！　できません‼」
愛する金剛お姉さまの頼みとあっては、この比叡、例え血の涙を流してでも応えてみせますと、比叡は盲

目的な姉妹愛を熱弁する。
「お姉さまが殿方のところに嫁いでも、榛名は大丈夫ですから」
だからどうか金剛お姉さまを幸せにしてくださいねと、ニッコリと微笑みながら荷物を運び続ける榛名。
「いや、別に本当の結婚をしたわけではないのだが」
苦言を呈するも、金剛とは違う悪意のない純真無垢な笑顔に、私は言葉を濁してしまう。
「霧島、まさか君もこのような茶番に付き合うとはな」
艦隊の頭脳を自称する君なら、論理的に金剛を説得して欲しかったものだなと、私は裏切られた気分で話しかける。
「いいえ。金剛お姉さまは、身勝手な行動をするお人ではありません」
しかし、霧島はキリッとした顔で、金剛を擁護する。
「とてもそうは見えないが」
「お気持ちはご理解できます。ですが、金剛お姉さまが、私たち三姉妹みんなから慕われている理由を考えてください」
もしも傍若無人なだけの姉でしたら、こうやって引っ越しを手伝うこともないでしょと、霧島は論理的な声で説明する。
「今の私には理解できないな」
「だったら、尚更同棲する必要があります」
共に過ごせば金剛お姉さまの良い部分も見えて来るでしょうと、霧島は一歩も引かず私を説得しようとする。
「了解した。君がそこまで言うのなら、とりあえずは認めてやろう」
霧島は比叡のように姉に対する愛情だけで動く艦娘ではない。彼女なりに必要なことだと思ってサポートしているのだから、ここは大人しく様子を見てみることにしよう。
……という感じに金剛を受け入れたわけなのだが、正直たった二、三時間一緒に過ごしただけで、疲労困憊している自分がいる。これからずっとこの関係が続くと思うと、気が滅入ってしまう。
「ヘーイ、提督！　何だか顔色が良くないネ！」

そんな調子だと明日からの仕事に支障をきたすネと、一応気遣いを見せる金剛。一体誰のせいでこうなってるんだと思いつつ、美味な夕食をご馳走になった手前、あまり文句を言うこともできない。
「そういう時は、ティーパーティに興じるのが一番ネ！」
今日は引っ越しで忙しくてやってなかったデースと、金剛はせっせとテーブルの上に我が家に運んだ紅茶セットを並べる。何でもリランカ遠征の時に土産として買って来た、英国式の本格的な一式なのだそうだ。
「提督ー、熱いうちに召し上がるネ！」
金剛は夕食後にも関わらずテキパキとスコーンを焼き、ティースタンドの上に並べる。そして紅茶を注ぎ、ささやかなティーパーティが始まった。
「お味の方はどうネ、提督ー」
リランカ土産の本格的な紅茶デースと、金剛は感想を訊ねてくる。
「普通に美味だ。まったく、料理の腕といい紅茶の淹れ方といい、それなりにこなすというのに、どうして君は」
そうまでハイテンションで落ち着きがないんだと、私はついつい苦言を呈してしまう。
「ホワット？　提督は大人しい艦娘がラヴなんデスカー？」
「そういうわけではないが……」
頭の中にふと扶桑の姿が思い浮かび、必死に打ち消す。彼女とはあくまで提督と艦娘の関係であり、恋愛対象としてみたことは一度もないと。
「でも私は扶桑じゃないから、そんなに静かにできないネ」
「！　どうしてそこで扶桑の名が出て来る！」
まるでこちらの内心を見透かされているようで、私は反射的に苛立ってしまう。
「そういう提督こそ、相変わらずクールじゃないネー」
呼ばれているほど冷静じゃないと、金剛は私をおちよくるように反論する。
「だから、誰のせいでこんな……」
「せっかくだから、冷静提督じゃなく、ツンデレ提督

に改名すればいいネ！」
「何だそれは？」
未知の言葉が出て来たことに、私は質問する。
「普段はツンツンしてるけど、実際はデレデレな人のことデース！」
今の提督にはピッタリな渾名デースと、金剛は自画自賛する。
「そんな訳の分からん名前で呼ばれてたまるか！」
冷たくあしらっているのは否定しないが、誰も君に惹かれてなどいないと、私は怒鳴り声で猛反発する。
「ホラ！　やっぱりクールじゃないネ！」
「ぐっ、ううっ……」
鋭い指摘に、私は煮え切らないながらも必死に怒りの衝動を抑える。
まったく、こんなに手こずらされる艦娘は、本当に初めてだ。この立ち回りの上手さは、確かに年長者かもしれないな。
私の求めた人材ではないが、最年長の艦娘が配属されたこと自体は認めなければならないな。これで年相応の落ち着きを持ってくれたら文句ないのだが。
まあ、共に生活することになった以上、私自身の手で矯正できるよう努めるようにしよう。金剛がおしとやかになるのが先か、私が折れるのが先か。考えるだけで憂鬱になりそうではあるが……。

第二章：スエズ作戦発動！

数日後、私は海軍省軍令部で行われる会議に横須賀鎮守府代表として参加するため、帝都に赴いた。

「……以上が、先の海戦における戦果です」

冒頭は各鎮守府の定期報告が行われ、私は潜水母姫戦の戦闘詳報並びにケッコン指輪の効能に関しての報告を行った。

「報告ご苦労だった、冷静提督。戦艦二隻の損傷は手痛いが、それを補うほどのあまりある戦果だ！」

私の報告を聞き、軍令部総長は上機嫌だ。私の采配ミスを咎めないのはありがたい限りだが、扶桑と山城の負傷が相対的に軽んじられているような物言いには、複雑な心境になってしまう。

「さて、今の冷静提督の報告に何か質問は？」

「はっ、はいー。あのー！」

真っ先に挙手したのは、呉鎮守府所属のロリコン提督だった。

「何かねロリコン提督？」

「ケッコン指輪による力の発動には、提督と艦娘との信頼と絆が必要不可欠。その手段の一つとして、艦娘との同棲が認められるということでしたが……そっ、それってつまり、ボクが駆逐艦の子たちと同棲しても、法的には何の問題もないってことですよね……？」

細身で落ち着きのない雰囲気のロリコン提督は、オドオドとした声で訊ねる。

「当然だ。他鎮守府分のケッコン指輪が完成次第、君も慕う艦娘と共同生活を送ってくれたまえ」

「!!　バンザーイ！　バンザーイ！　バンザーイ！」

軍令部総長のお墨付きがもらえた瞬間、ロリコン提督は会議中であるにも関わらず、突然起立しながら感涙の万歳三唱をする。

それほどまでに、艦娘と同棲できるのが嬉しいのか。金剛に一苦労している私には、到底理解不能の感情だが。

彼は、その渾名が示す通り、駆逐艦娘を好む提督だ。提督になったのも、「合法的に小っちゃい子と親密に

なれる」という、不純な動機からだ。
駆逐艦娘は総じて好みのようだが、「朝潮型はガチ」とのことで、朝潮型の集中運用を行っている。
もっとも、「イエス！　ロリータ　ノー！　タッチ」が信条らしく、艦娘たちにセクハラ紛いのことは決してせず、ロリコン提督などという不名誉な渾名にも文句は言わないのだから、根は善人で間違いないだろう。
「さて、質問がないならば、以上で定期報告は終了とする。続けて、今後の作戦方針について話す」
そうして、軍令部総長は会議の本題とも言える作戦方針を語り始める。
「横須賀鎮守府の奮闘により、我が国の近海を脅かしていた敵潜水艦の脅威は払拭された。これにより、南方とのシーレーンが回復し、資源の方は次第に回復に向かうであろう」
しかしながらと、軍令部総長は一呼吸置いて語る。
「だが、前世界での大戦とは違い、我が国の目的は南方資源の獲得に非ず！」
改めて諸君等に問う。深海棲艦との戦いの最終目標は何かねと、軍令部総長はみなに問い質す。
「当然、制海権の奪還です！」
私は真っ先に挙手した。
「その通りだ、冷静提督。南方とのシーレーン回復は、制海権奪還の一過程でしかない」
では、次なる一手はどこに打つかと、軍令部総長は語る。一つは東征。太平洋の島々を深海棲艦から奪還し、米国との交易路を回復させること。もう一つは西征。欧州との交易路の回復だ。
「このうちどちらを優先させるかだが……私は西であると思う」
その理由は二つ。一つは、米国の戦況が不明であること。米国は大西洋、太平洋双方から深海棲艦に襲撃され、両面作戦の対応に追われていると推測される。
あくまで推測に過ぎないのは、米国は日本とも欧州諸国とも完全に分断され、前述のように戦況すらまったく摑めない状況であること。嘗て米国が統治していた島々が、尽く深海棲艦に占領されていること。これらの島の奪還に米艦隊が出現しないところをみると、

本土の防衛で手一杯であると考えるのが妥当であるとのことだ。
米国との交易路を回復するには、MI並びにハワイの攻略が不可欠だが、どちらも前世界では奇襲に頼らなければならなかったように、これらの島々の奪還は甚だ困難を極める。
もう一つは、石油資源の安定的な供給だ。中東の産油地帯は欧州諸国に留まらず、我が国にとっても生命線となり得る。ペルシャ湾に展開する深海棲艦を排除できれば、この地帯とのシーレーンが回復し、石油資源はより安定する。
「もっとも、前世界と同様、この世界における我が国の国力も乏しい。ペルシャ湾から本国にかけての交易路の恒久的な維持は、我が国のみでは到底できぬ」
そこで必要となって来るのが、欧州諸国との交易路の回復だ。我が国と欧州が協力して、集団自衛的に交易路の維持に努めることが求められると、軍令部総長は説く。
「よって、西征の最終目標は、スエズ運河の奪還にある！」
例え他を攻略しても、スエズ運河に巣食う深海棲艦の撃滅無くして、欧州諸国とのシーレーンの回復は叶わないと、軍令部総長は力説する。
「だども、スエズ攻略するには、問題が山積みでねぇが？」
そんな時、ややどもった口調で、ガッシリとした体格の提督が挙手した。
彼は大湊警備府に所属する野獣提督だ。筋肉質で全身が毛深い野性味溢れる体躯から、そう呼ばれている。
東北出身で、そのことから東北の地名に由来する艦娘で構成されている。編成は、最上、北上、能代、阿武隈、名取と、軽巡が中心だ。以前は羽黒も在籍していたが、彼女が少年提督の元に編入を希望したことで、欠員が生じている。
この枠を巡って、他の東北の地名が由来の艦娘を迎え入れたい野獣提督と、北上と同じ艦隊への編入を希望している、姉妹艦大井との間で係争ごとに発展しているとの話も聞く。

私が同じ立場だったら、大井を一蹴して自分の望む艦娘を編入させるところだが、果たして彼がどう出るか興味深い。
「その通りだ。スエズ運河を攻略するに当たって壁となるのが、カスガダマ沖に展開する深海棲艦の存在だ」
この部隊が存在する限り、スエズ運河を攻略中に背後から強襲される危険性があり、攻略を困難なものとする要因となるだろうと。
「そして、スエズ運河そのものにも問題がある。誰か理解している者はおるか？」
「はい。海域ではなく、運河という特殊な環境であることです」
私は真っ先に挙手して、説明を始める。スエズ運河の最大航路幅は八九メートル、水深は一四・五メートル。この狭さでは回避力に劣る低速戦艦は格好の的にしかならない。また、水深も浅く、潜水艦娘の運用は不可。艦載機による雷撃も満足に行えない。
「よって、運河内における低速戦艦の運用は困難を極め、艦載機による雷撃も、前世界で水深一二メートルの真珠湾における雷撃を成功に収めた、第一機動部隊の正規空母娘にしか成し得ないでしょう」
つまりは、運用可能な艦娘は限られると、私は説く。
「うむ。その通りだ。運河の攻略には、高速戦艦並びに正規空母を部隊とした艦隊が適切だと思われるが……」
そこで軍令部総長は言葉を濁した。軍令部総長の編成例は的確だ。何も問題がないはずだが。
「実は、この艦隊編成では、スエズ運河の攻略は難しいと思われる」
それは運河に展開する、深海棲艦の規模だという。スエズ運河の北にはポートサイド、南にはスエズという港町が築かれているが、この両端の港内は、港湾棲姫を基幹とした部隊が存在しているという話だった。
「むむむ。港湾棲姫を低速戦艦抜きで二体も倒すのは、不可能でおじゃるか？」
軍令部総長の発言に賛同するように、身長がやや低い、公家のような口調の男が呟く。彼は舞鶴鎮守府に所属する麻呂提督。由緒正しい華族階級出身の提督で

あることから、その渾名で呼ばれている。
艦隊は、妙高、熊野、由良、如月、初春、夕雲と、おしとやかな雰囲気だったり、お嬢様的口調だったりする艦娘で編成されている。
「そうだ。幸いスエズ湾に展開する港湾棲姫は低速戦艦をぶつけられるが、ポートサイドの攻略は不可能だ」
よってスエズ運河攻略は、欧州諸国との連携が不可欠だと、軍令部総長は説く。
「今現在同盟国であるドイツと協議中で、協力が得られ次第、作戦を発動したいと思う」
作戦は二段階に分かれる。第一段階は、ペルシャ湾とカスガダマ沖の攻略。そして第二段階は、紅海とドイツ海軍との連携によるスエズ運河攻略。後顧の憂いを絶った上で、スエズ運河を攻略しようという算段だ。
補給の困難さから、この作戦は二、三ヶ月の短期決戦で臨まねばと、軍令部総長は説く。
「そしてスエズ運河だが……展開する深海棲艦は、南北の湾だけではない」
スエズ運河の中央部に位置するグレートバター湖には、敵艦隊の展開が確認されていると。
「幸い、スエズ湾からグレートバター湖までは、直線距離にして約四〇キロ。四六センチ三連装砲の射程圏内ギリギリだ」
よって低速戦艦による弾着観測を用いた支援射撃が有効策だと、軍令部総長は説く。
「それと詳細は不確かだが……その北に位置するワニ湖には、未知の深海棲艦の存在が確認されている」
周囲の制空権確保が難しく、遠方からの偵察によって辛うじて撮影に成功した姿がこれだと、軍令部総長は資料に添付された写真を見るよう促す。
『!?』
その瞬間、場内には戦慄が走った。薄っすらと写真に写るその影は、まるでエジプト神話のスフィンクスを彷彿とさせる姿だった。
「運河棲姫と名付けられたこの深海棲艦がどの程度の戦力を保持しているかは未知数だが、ドイツ海軍との挟撃により運河棲姫の撃破が、今作戦の最終目標となる！」

得体の知れぬ深海棲艦を倒さねばならぬという目標に、会議場のみなの気が一気に引き締まった。
「最後に、この作戦は〝スエズ作戦〟と名付ける。前世界での帝國海軍は、カスガダマに相当する島に潜水艦部隊を派遣した程度で、この海域の攻略は行っていない」
よってスエズ作戦は、艦娘にとっても馴染みのない海域での戦闘となる。困難を極めるが、何としでも達成し、欧州諸国とのシーレーンの回復に努めねばらなぬと軍令部総長は檄を飛ばし、会議の幕は閉じたのだった。

◇　◇　◇

「失礼します」
会議終了後、私は海軍省内にある情報処理室を訪れた。
「ウー！　ワンワン!!」
扉を開けるや否や、二匹の樺太犬が私を出迎えてくれる。
「あらーお客さんですねー。お出迎えありがとうですー、タロ、ジロ」
飼い主が声をかけると、二匹の樺太犬は声の主の方へと駆け寄って行く。
「えーと。情報検索に来たのでしょうかー？」
「いえ。室長にお会いしに」
「そうでしたかー。では、ご案内しますねー」
駆逐艦より若干小柄で、眼鏡のかけた少女に導かれ、私は情報処理室の奥へと進む。
彼女の名は特務艦宗谷。戦闘力は皆無だが、戦前は特務艦として様々な任務に従事した。
戦争を生き延び、戦後は南極観測船など幅広い活躍を行い、引退後も長らく船の科学館において展示されていた経歴を持つ。
そういった経緯から、彼女の保有する知識は凄まじく、パソコンやスマホといった最新機器は、全て宗谷からもたらされたものである。
「失礼します！」

私は宗谷に案内され、件の人物の前に立ち、敬礼する。
「おや。久し振りだね、冷静提督。元気にしていたかね」
資料が山積みになった机の上に置かれたパソコンを操作している初老の男は、私が声をかけるとこちらを振り向き、紳士的な態度で接してくれた。
彼の名は、吉賀。前世界において海軍乙事件で殉職した、連合艦隊司令長官古賀峯一である。
川本さん同様艦隊の指揮はせず、情報処理室の室長として、資料の編纂に当たっている。
「わざわざ私を訪ねて来たということは、検索しても調べられないことを聞きたいからかね？」
このパソコンというのは非常に便利でね。大概のことはデータベースにアクセスすれば事足りるけど、それでも分からないことがあるからねぇと、吉賀さんは落ち着いた声で話す。
「はい。ケッコン指輪に関して、吉賀さんの見解をお聞きしたいと思いまして」
私はケッコン指輪に関する持論を展開した。ケッコン指輪の効能そのものは認めるが、艦娘との信頼と絆という精神的な要素が関わるものに頼るのは、嘗て精神主義に陥った大日本帝國軍の二の舞を演じることになるのではないかと。
「成程。君の危惧するところはよく分かる。確かに、理論よりも精神論が横行する状況は好ましくない。前世界で負けた要因の一つが、精神論に傾斜していたことだと言っても過言ではないからね」
しかしながらと、吉賀さんは私の見解に一定の理解を示しつつ、話を続ける。
「帰還兵がＰＴＳＤ―心的外傷後ストレス障害―を引き起こすという事例にもある通り、あくまで作戦遂行において精神論がまかり通るのがいけないのであり、戦争において兵士の精神的ケアというのは重要な位置付けにあるんだよ」
どんなに機械が発達したとしても、結局のところ戦うのは人間だ。艦娘を兵器ではなく意志を持った人間と認識するならば、ケッコン指輪は積極的に戦術に組み込むべきだと吉賀さんは説く。
「君はその名の示す通り、戦場で冷静な判断のできる

男だ。それならば、論理的にケッコン指輪を運用できるはずだよ」
（論理的にか……）
それが可能ならば理想的ではある。しかし、当の相手があの傍若無人な金剛であるならば、論理的に指輪の力を発揮させる自信はない。
「吉賀さんの見解はよく分かりました。ただ私としては、ケッコン指輪は奥の手とし、それ以外の方法で深海棲艦に対抗できればと思うのです」
「それ以外の手だね。ないことはないが……」
「何かあるんですね？」
差し支えなければ教えて頂けないでしょうかと、私は無理を承知で頼み込む。
「そうだね。君になら託せるだろう」
こっちに来なさいと、吉賀さんは宗谷と共に情報処理室の奥へと私を案内した。
「ここだよ。入りなさい」
案内された場所は倉庫で、私は言われるがまま中へと入る。
「これは!?」
倉庫に入った途端、私は驚愕した。目の前に置かれているのは、間違いなく艦娘の艤装だ。しかし、どれもこれも見慣れないものばかりで、驚きを隠せなかった。
「吉賀さん、これは？」
「これはね、宗谷によってもたらされた戦後の護衛艦の知識を基に製作された、艦娘用の艤装だよ」
宗谷は船の科学館に展示されていた経緯から、あらゆる艦船の知識が豊富だそうだ。そんな彼女が設計図を描き、妖精たちに作らせたのだそうだ。
「素晴らしい！　これがあれば、ケッコン指輪に頼らずとも!!」
戦局の打開が叶うと、私は興奮を隠し切れなかった。
「しかし、これらの艤装には、根本的な問題があるんだよ」
「問題？」
「そもそも、艦娘たちはこれらの艤装を装備できない」
「!?」

吉賀さんは無念そうな声で説明する。
「承知の通り、駆逐艦は戦艦の艤装を扱えず、逆も然りだ」
故に、護衛艦という艦種の艦娘が存在しない以上、これらの装備は誰にも使いこなせないと、吉賀さんは語る。
「以前、試しに日向さんにSH-60Jを運用させてみようと試みたんですけどぉ」
と、彼女は艦娘サイズのヘリコプターを見せてくれた。
「やっぱり上手く使えませんでしたぁ」
もしも使用できたら航空戦艦としての力を増大できただけに残念がっていたと、宗谷は語る。
ちなみに宗谷は南極観測船時代にヘリの運用を行った経験もあり、一応は扱えるとのことだった。
「そう、ですか……」
強力な新兵器があるにも関わらず、使用不可。もどかしさを感じずにはいられないな。
「そう気に病むことではないよ、冷静提督。確かにこれらの兵器が使用できれば、戦局は打開できるかもしれないが……それは些細な問題に過ぎないよ」
「どういうことです？」
「戦場においてもっとも重要なのは兵器の質ではない。〝情報〟だよ」
敵の位置を正確に把握し精密な攻撃ができれば、護衛艦の艤装などなくとも戦局は打開できるはずだと、吉賀さんは力説する。
「ミッドウェーでの大敗は、索敵を怠ったことが原因と言っても過言ではないし、私が死んだ海軍乙事件でも、機密情報を敵に奪われてしまったようだからねぇ……」
海軍乙事件とは、前世界において連合艦隊司令長官古賀峯一が二式大艇で移動中事故に遭い、殉職した事件だ。飛空艇は全部で二機であり、一機は不時着し、その時積んでいた最重要軍事機密文書が米軍に渡り、その後の作戦に少なからず影響を与えたという。
「では、その情報戦で深海棲艦に対して絶対的優位に立てる手段は何だと思うかね？」

「えっ!?」
私は吉賀さんの質問に答えられなかった。〝絶対的な〟優位に立てるなど、そんなことが可能なのかと。
「分からんかね？　ではヒントをやろう。奴等は深海棲艦。その名の通り、深海に棲息するモノだ。では逆に、この地球上で奴等の手の届かない場所はどこかね？」
「それは、地上……」
いや待て。深海棲艦は地上侵攻に興味を示さないだけで、手が届かないわけじゃない。つまり質問の答えは、文字通り侵攻不可能な領域。
「あっ！」
「分かったかね」
「ええ。この地球上で、奴等の手の届かない場所はありません。そう、〝地球上〟では……」
つまり、地球外。成層圏の遥か彼方までは、奴等は侵攻不可だと――。
「その通りだよ、冷静提督。我々人類が情報戦で圧倒的に優位に立てる場所。それは、〝宇宙〟だよ！」
吉賀さんは天を指差しながら語る。宇宙に人工衛星を飛ばすことが叶えば、この地球上を丸裸にできると。
「偵察衛星を用いて絶えず深海棲艦を監視し、ＧＰＳを用いて敵の位置を正確に把握し、先制攻撃を加えることも可能だ。奴等が侵攻したくともできない宇宙にさえ我々が進出できれば、少なくとも情報戦においては完全勝利できるが……」
「……？」
そこでまたしても、吉賀さんは溜息を吐く。
「だがこれらの技術は、概念を知っているだけに過ぎないのだよ」
宗谷は艦船の技術に関しては豊富だが、航空宇宙技術に関しての知識までは持ち合わせていない。あくまでそういうのが存在しているというのを知っている程度に過ぎないと。
「航空宇宙技術を実用化まで持って行くのには、数十年の時を要するだろうね」
それまで果たして人類が深海棲艦に屈せずに戦い続けることができるだろうかと、吉賀さんは不安気な声で呟く。

「無論。手がないわけではない。ヴェールヌイへと改装された響から、ソ連の衛星技術を多少は聞き出すことができた」
　得られた情報は宗谷と同程度だが、それでも後年の発展した技術ではなく、黎明期の技術に触れられ、基礎的な研究は始められそうだと、吉賀さんは語る。
「だけど、それでも時間がかかるのには変わりないですね」
「そうだ。だからこそ、衛星技術を発展させるのには、米国の艦娘の技術が必要不可欠だね」
「どういうことです？」
　吉賀さんは語る。米国の第二次世界大戦で活躍した艦艇のいくつかは戦後記念艦として残され、実戦で運用されていた期間も長いと。
「推測の域を出ないが、それらの艦船が艦娘となって転生していて衛星技術の知識を持っていれば、戦局は確実に変わるだろうね」
　ひょっとしたら、米国では既に実用段階に入っているかもしれない。いずれにせよ、彼女たちと接触するために、米国との交易路の回復は、必要不可欠だと。
「前世界では奇襲しかできなかったハワイにも、戦略的には本格的な進行を行わなくてはならないということですね」
「その通りだよ。あの島は、米国との交易において、重要な拠点の一つだ」
　太平洋の島々を深海棲艦から奪還する最終目標はハワイだと、吉賀さんは強調する。今日の会議でも、最優先事項ではなかったが、ハワイ攻略は話題の俎上に上がった。
　欧州とのシーレーンが回復した暁には、必ず行わなければならない作戦だ。制海権を人類の手に取り戻すための戦いは、まだまだ終わりそうにないな。挫けずに気合を入れて臨まなければな。
「今日は色々とありがとうございました、吉賀さん。ではこれで」
　私は整然と敬礼し、倉庫を後にしようとする。
「ああ。待ちたまえ。せっかくだ。好きな艤装を持って行きなさい」

前述の通り、艦娘には装備できないが、何かしらの役には立つかもしれない。任意の艤装一式を後程横須賀鎮守府に運送するよと、吉賀さんは快い声で語ってくれる。

「ご厚意感謝します。では、対空防御力にもっとも優れた艤装をお願いします」

「対空防御？　攻撃ではなくてかね？」

「はい。艦隊戦においてもっとも大切なのは、敵を倒すことではなくて、艦娘たちを守り通すことだと思いますので」

そう――。どんなに敵に深手を負わせても、防御が手薄では痛恨の一撃を食らう危険性がある。扶桑の悲劇はもう二度と繰り返してはならないと、私は信念を強く訴える。

「攻撃よりも防御か。悪くない思想だね」

そんな君に最も相応しい艤装はこれだと、吉賀さんは件の艤装が置かれてある場所へと案内してくれる。

「これは？」

「これはね、イージス艦〝こんごう〟を基にした作られた艤装だよ」

「!?」

こんごうという名に、私は思わず反応してしまう。無論、あの金剛ではなく、未来の艦艇だ。しかし、私の信念に合致する艤装が、よりにもよって彼女と同じ名を冠した艦艇のものだとは。奇妙な運命を感じずにはいられない。

「イージス艦の名前の由来は、ギリシャ神話に登場する、あらゆる厄災を振り払う究極の盾だ。その名は伊達ではなく、イージス艦は一二八の目標を同時に捕捉、追跡することができる」

そしてイージス艦の根幹は兵装ではなく、それを形成するシステムにあると。

「イージスシステムは、レーダー、射撃管制、武器管制など、様々なシステムの複合体だ。コンピューターを用いてそれらを運用することで、無敵の防衛力を誇る」

もっとも、兵装ではなくシステムだからこそ、習得はより困難だと吉賀さんは語ってくれる。

「ありがとございます。快く受け取ります」
私は深々とお辞儀をした。もしもイージスシステムを搭載した艦娘があの時いたら、扶桑は大破することなく、逆にヲ級改を撃破していただろう。
あの悲劇を繰り返さないため、イージシステムを使いこなせる艦娘を早急に鍛え上げなければならない。
それは不可能を可能にしようとする、無謀とも言える試みだ。
だが、私はやってみせるぞと心に強く誓い、情報処理室を後にした。

◇　◇　◇

帝都からの帰投中、私は鎮守府に隣接する軍病院の艦娘特別治療棟へと立ち寄った。ここは大破以上の傷を負った艦娘を収容する施設だ。先の海戦で大破した扶桑は、この病棟で治療を受けている。
「……」
病室を前に、私の足は立ち止まる。この先には扶桑がいる。しかし、私の采配ミスで大破させてしまった扶桑にどんな顔で会えばいいか分からず、病室に入ることに臆してしまう。
今までは病院に来ることさえ拒んでいて、今日ようやく病室の前まで来る覚悟ができた。
責任を感じているのなら、謝罪をする意味でも余計に見舞わなければならない。だが、面と向かって扶桑と顔を合わせる勇気が湧かない。
「……」
結局私は病室前で踵を返し、担当医に容体を聞くことにした。
「あら。ようこそお越しくださいましたー」
担当医の部屋に入ると、丁寧な言葉で挨拶をされた。彼女の名は病院船氷川丸。前世界ではその名の通り、兵士たちの治療に当たっていた。この世界では前世界での経験を活かし、大破以上の傷を負った艦娘の治療に当たっている。
工作船明石は艤装の修理修復はできても艦娘の治療はできないので、氷川丸の存在は貴重だ。彼女は戦後